

10ヶ月後の1982年9月11日には、288・00km/hという最高速を出し、RE雨宮の名前を不動のものにした。



ペリペリのエキゾーストサウンド
288km/h
RE雨宮

たネ。

258を出した時、ペリは限界だと思った。チューンはターボきやないと思つてターボをやり始めた。

始めは、ポルトオンキットしかなくて苦労したね。13Bのサイドのターボ、230km/hでタービン溶けちゃった。277・45km/hの時はエンジンは大丈夫だったけど、ミツシヨンがいかれた。288は、13BにK26のタービン2個で出したものだけこの時は、本当にうれしかったヨ。なんと涙が出たもんナア。

82年の10月に、RSヤマモトが290・32を出した時は、スピードの差が小さかったので、シヨックはそれほどでもなかった。けど、298・02を出された時は、正直いつて、今では考えつかないぐらいシヨックは大きかった。それでも、12Aにしては、スピードも意外と伸びたので、まだまだと思つたネエ」と、RE雨宮の快進撃ぶりを振り返った。それ以後は、やるたびにマイナーなトラブルが出て、数字の方がいいまいだった。でも、290、29

3km/hと、少しずつだけ下回っていったことが雨宮勇美と、その下で働く彼等の救いになったともいえる。

そして、前述の307・955km/hの出た12月21日となる。

義理深い人情家 雨宮勇美・人としての魅力

雨宮勇美 昭和21年3月3日生
山梨県出身

中学を出て東京で塗装の仕事につく。昭和49年には、雨宮塗装という飯金塗装の工場を開業する。

ここで、雨宮勇美が現在のようになるひとつのキッカケがあった。飯金塗装に入ってくるクルマが、何故かマツダ車が多かったこと、それに

←この頃のアマさんの愛車は、マツダのキャロル、360ccの軽自動車だ
→セドリックの前で記念写真？ 今からは思いもよらないカワイイ顔だ！



→ご幼少の頃のアマさん、クルマはマツダR360クーペ、3人乗りのユニークな車だった



アマさんが自分の足にしていたのがロータリー車、そして、ディーラーにチューニングをたのんだが、思っていたほどパワーがなく、それで自分でエンジンをバラしたのがキッカケという。

飯金塗装とエンジンチューニングをやっていたが、ノーマルでも十分速いロータリーだが、それを安い費用ですらに速くできたため、若い人の間ではもてはやされた。



→午後3時すぎになると始まる“お茶”の時、話の中心はきっとチューニング
→RE雨宮の前にならんだ。右から孝三、アマさん、浜ちゃん、良一、拓、場の面々



「と見えるものだった。こんな話もある。アマさんが免許証の更新に行った時のこと、普通なら雨宮勇美を知っている人は多くないはずだが、並んでいると「あれRE雨宮だ」なんてこともあったとか。チューニングカーファンの間で、RE雨宮の名を高くしたのは、なにも、チューニングしたエンジンの実力だけではない。なんといっても雨宮勇美自身の人柄も大きく影響しているだろう。

丸顔に、口ヒゲ、バーマの頭と、まるで熊みたいに見えるが、その実体は意外や意外で、人なつこく、しかも義理深い人情家なのである。とつきにくいのが、一度なれてしまふと非常につき合ひやすい、そんな感じの人間である。だから、一度工場へ遊びにいったりすると、また来ようという気になる。そんな人を引きつけてしまう魅力がアマさんにはあるのだ。

その証拠に、アマさんのもとで働く、浜ちゃん、良一、孝三とも、もう10年近くにもなる。また、堀や拓にいたっては、雨宮勇美に惚れ込んでの押し込みで働くようになったという。この世界は、比較的、人の出入りの激しいところだが、ひとつの所に10年の長さや、「給料はいらないから使つて」というのは、まさに雨宮勇美の魅力であろう。

昭和52年には、雨宮自動車として東京は江東区の北砂に工場を移した。この頃になると、本来の本業である飯金塗装よりも、エンジンチューニングの方が多くなっていった。もちろん雨宮勇美の仕事も、彼本来の飯金塗装よりも、彼独自のポート研磨などの仕事の方が多くなっていったのはいうまでもない。

最後に、ロータリーで初の3000km/hオーバーを果たした雨宮勇美は、「疲れたノ。目標の3000km/hオーバーは果たしたので最高速チャレンジは、ひとまずピリオド。しかし、ロータリーで、この数字をオーバーされれば、また、やるさやないネ」と語ってくれた。

特集 ●ロータリーチューン

